

(PDF版・3の10) 『教会教義学 神論 I / 1 神の認識』 「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」

(文責・豊田忠義)

「五章 神の認識 二十六節 神の認識可能性」 「一 神の用意」 (115-231頁)

「一 神の用意」

さて、「われわれが教会の〈かしら〉および牧者として信じている神」は、「主、創造者、和解者、救済者であり給うのであるから」、また「われわれは、神の認識可能性を、ただ神の自由な適意として理解されるべき神ご自身の用意の中でだけ見出すことができるのであるから」、「われわれは、神の認識可能性を確かめるためには、したがってわれわれの神認識の確実性を確かめるためには」、「ただ神によって遂行されたその介入の实在を堅くとして離さないでいるしかないのであって」、「われわれは、ただ神の認識可能性に対して感謝することができるだけであり」、「したがってわれわれは、神の認識可能性を、……何らかの仕方ですでに持っており、自分で取る得であろうところでは見出すことができず、すでに存在している類比の中で見出すことはできず」、「ただ神の恵みを通して〈造り出される〉ことができる類比の中でだけ見出すことができるということを」、「それに対してわれわれが理解を絶した实在の中でわれわれにとって近づき得るものと〈された〉近づき得ないものとして、然りを言うところの恵みと信仰の類比の中でだけ見出すことができるということを、〔そのことは「簡単に自明的」なことではないが、〕言うことができる」。このことを詳しく言えば、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「われわれが教会の〈かしら〉および牧者として信じている神〔キリストにあっての神としての神〕」は、「主、創造者、和解者、救済者であり給うのであるから」、また「われわれは、神の認識可能性を、ただ神の自由な〔われわれの信仰と認識の決断以前に、彼岸で、外ですでに下されたところの〕神の側の真実としてある〕適意として理解されるべき神ご自身の用意の中でだけ〔換言すれば、イエス・キリストにおける神の自己啓示からして、その「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉の中でだけ〕見出すことができる」。言い換えれば、「神が〈われわれにとって〉認識可能であるということ」は、「全くただ神の恵みを通してだけ出来事となって起こるから」、すなわち全くただ神のその都度の自由な恵みの神的決断による客観的なイエス・キリストにおける「啓示の出来事」(客観的な「存在的な〈必然性〉」)と〈と〉その「啓示の出来事の中での主観的側面」としての「復活され高擧されたイエス・キリストから降下し注がれる霊である」「聖霊の注ぎ」による「信仰の出来事」(主観的な「認識的な〈必然性〉」)に基づいてだけ起こるから、「われわれは、神の認識可能性を問うわれわれの問い全体を、ただそのすでに下された神的決断へと戻って行くこととして表示

し理解する時、神の〈恵み〉のことを考えている。しかし、「われわれは、神の認識可能性を確かめるためには、したがってわれわれの神認識の確実性を確かめるためには」、常に先行する「神の用意」に包摂された後続する「人間の用意」ができているところの、「人間に対する神の愛と神に対する人間の愛の同一」（『ローマ書』）であり、「永遠の（神との人間の）和解」（徹頭徹尾神の側の真実としてのみある、神の側からする神の人間との架橋）であり、「神との間の平和」（ローマ五・一）であり、それ故に「神の認識可能性である」「自己自身である神」としての自己還帰する対自的であって対他的な（それ故に、完全に自由な）聖性・秘義性・隠蔽性において存在している「父なる名の〈内〉三位一体的特殊性」「三位相互〈内在性〉」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「一神」・「一人の同一なる神」・「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かって」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方、すなわち「啓示ないし和解の實在」そのものとしての起源的な第一の形態の言葉、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と自己疎外化」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの〈名〉」）イエス・キリストにおいて、「神の用意の中に含まれて、人間にとって、神に向かっての、したがって神認識〔すなわち、信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事〕に向かっての人間の用意が存在する」のであるから、「ただ神によって遂行されたその介入の實在を堅くとして離さないでいるしかないのであって」、「われわれは、ただ神の認識可能性に対して感謝することができるだけであり」、それ故にわれわれは、「存在するものそのもの、その純然たる造られた存在、造ラレタモノヲトオシテ、知解サレタ創造主ヲ認識シテ、私タチハ三位一体ナル神ヲ知解スルヨウニシナケレバナラナイ、ソノ跡ハフサワシイカタチデ被造物ノウチニ顕レテイルノデアル」と「存在の類比」に依拠して思惟し語るアウグスティヌスのように、「神の認識可能性を、……何らかの仕方ですでに持っており、自分で取る得あろうところでは見出すことができず、すでに存在している類比〔「存在の類比」〕の中で見出すことはできず」、「ただ神の恵みを通して〈造り出される〉ことができる類比の中でだけ〔すなわち、「恵みの類比」だけ——信仰の類比、関係の類比、啓示の類比の中でだけ〕、それに対してわれわれが理解を絶した實在の中でわれわれにとって近づき得るものと〈された〉近づき得ないものとして、然りを言うところの恵みと信仰の類比の中でだけ〔すなわち、神のその都度の自由な恵みの神的決断による「啓示と信仰の出来事」に基づいて与えられる信仰の認識としての神認識、啓示認識・啓示信仰、人間的主体に実現された神の恵みの出来事に依拠した「信仰の類比」の中でだけ〕、見出すことができる……」、ちょうどわれわれがイエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の〈総体的構造〉に基づいて「本当に神の啓示を認識する時〔本当に神の啓示を信仰する時〕」、「われ

われは、初めて、神に対する人間的反抗、神の敵、神に相對して自分の力を誇り、まさにそのことの中でこそ罪深い墮落した人間〔換言すれば、キリストにあっての神としての「神だけでなくわれわれ人間も、われわれ人間の自主性、自己主張、自己義認の欲求もという無神性、不信仰、真実の罪」のただ中にある罪深い墮落した人間〕としての自分自身を、またそのような人間の世を自己認識〔・自己理解・自己規定〕で「できる」ように、それ故にその時、イエス・キリストにおける「啓示ないし和解の出来事の内容」は、「生来人間は、神の恵みに敵対し、神の恵みによって生きようとしないうが故に、このことこそ、第一に恵みが解放しなくてはならない人間の危急であったということ¹をわれわれ人間に自己認識〔・自己理解・自己規定〕させる」ように、それ故にその時、「神の選びをイエス・キリストの復活において認識し〔信仰し〕、神の放棄をイエス・キリストの十字架において認識する〔信仰する〕ことができる」ように（『カール・バルト著作集3』「神の恵みの選び」および『福音と律法』ならびに『教会教義学 神の言葉』）。このような訳で、われわれは、「神の認識可能性」を、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている啓示に固有な自己証明能力」の＜総体的構造＞に基づいて、「先ず第一義的に優位に立つ原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕としての〔起源的な第一の形態の神の言葉である〕イエス・キリストと共に、〔第三の形態の神の言葉に属する〕教会の宣教における原理〔・規準・法廷・審判者・支配者・標準〕である」第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準として、終末論的限界の下でのその途上性で、絶えず繰り返し、聖書に聞き教えられることを通して教えるという仕方で、純粋な教えとしてのキリストにあっての神としての神を尋ね求める「神への愛」（「教えの純粋さを問う」＜教会＞教義学の問題、＜福音主義的な＞教義学の問題）＜と＞、そのような「神への愛」を根拠とした「神の讚美」としての「隣人愛」（純粋な教えとしてのキリストの福音を内容とする福音の形式としての律法、神の命令・要求・要請、全世界としての教会自身と世のすべての人々が第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている純粋な教えとしてのキリストの福音を＜現実的に所有する＞こととができるためになすキリストの福音の告白・証し・宣べ伝え、すなわち区別を包括した単一性において、＜教会＞教義学に包括された「正しい行為を問う」特別的な神学的倫理学の問題）という連関と循環において、イエス・キリストをのみ主・頭とするイエス・キリストの活きた「ヒトツノ、聖ナル、公同ノ教会」共同性を目指して行く中で言うことができる。

そのような訳で、われわれは、そうして行く中で、「神の恵みとは違ふ、したがって信仰とは違ふ神の認識可能性の保証を探し求める神学、あるいはそのようなものが存在し得ると考え・約束する神学」——すなわち「＜『自然』神学＞はすべて、教会の領域では不可能であり、しかも根本においては＜議論の余地なく不可能＞であると

いう洞察」をなすことができる。「何故ならば、＜『自然』神学＞は、ローマ・カトリックの教説〔すなわち、形而上学的にその一面だけを抽象し固定化し全体化して、それ故に抽象的ニ「神の一つの面だけを……考える」分割、「主および創造者なる神だけを考える」分割、このことを「念頭に置いた神の認識可能性」のローマ・カトリックの教説〕とわれわれの対決が示したように、ただキリスト教的な神概念に対する暗殺計画に基づいてだけ可能となり得るからであり、キリスト教的な神論が、それと共に教義学が、したがって純粋な教えを問う問いが、この暗殺計画でもってはじまるということは、そもそも全く問題とならないことだからである」。第三の形態の神の言葉である教会が、第三の形態の神の言葉である「教会の根拠および存在である」ところの、「教会に宣教を義務づけている」起源的な第一の形態の神の言葉であるイエス・キリスト自身を起源とする第二の形態の神の言葉である聖書（その「最初の直接的な第一の預言者および使徒たちのイエス・キリストについての言葉、証言、宣教、説教」）を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準としないで、それが人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍のそれであり、自然科学におけるそれであれ、人文科学における「哲学、歴史学、心理学等」のそれであれ、その「教会の根拠および存在以外のところを標準〔・原理・規準・法廷・審判者・支配者〕にして自分を方向づけるならば、そこから何か良い結果が出て来るはずがあるか」、良い結果が出て来るはずはないのである。この意味において、「哲学、歴史学、心理学等は、この神学的問題領域のどれにおいても、事実上、教会の自己疎外の増大以外のなものにも役立ちはしなかった」し、「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしなかった」のである（『教会教義学 神の言葉』）。したがって、東北学院大神学者の佐藤司郎や東京神学大実践神学者の小泉健が、ルドルフ・ボーレンが対象化し客体化した人間的な自然（彼の観念的生産物）としての彼の意味世界、「存在者レベルでの神」における「＜聖霊＞論的説教論」なるものに依拠して、「バルトの神学においては人間の経験の位置づけが弱いから、人間の経験〔言わば、近代主義的に近代的な人間の感覚と知識を内容とする経験的普遍〕を尊重すべき」というようなことを主張した時、そのような主張は、「教会の自己疎外の増大以外のなものにも役立ちはしな」し、「神についての教会の語りの墮落と荒廃以外の何ものにも役立ちはしな」だけでなく、例えばハイデッガーからは、そのような主張における「存在者レベルでの神」を信じるくらいならば、「それよりは『むしろ無神論という安っぽい非難を受け入れた方がよい』」と根本的包括的に原理的に「揶揄」・批判されてしまうのである。

さて、「神の認識可能性についての洞察は、実際には、それほど簡単で自明的ではない……」。何故ならば、「われわれ自身の中にある、あるいは世とわれわれの間に中にある、〔『自然』神学〕の段階で停滞し循環した〕われわれの神認識の根拠を

尋ね求める問いが、そのまま止んでしまわずに、繰り返しよみがえって来なければならない」からである。

(1) 「『自然』神学」における「神認識……が事実可能であり、遂行し得るものであり、その〈事実的な遂行〉の中で自らその権利と必然性を裏づけ語っているという」時、そこでは「一体、〈何〉が……可能であり、遂行し得るものなのであろうか。また、〈何が〉……自分自身を支持しつつ語っているのであろうか」、「そこで問題となること」は、「彼の現実存在および世の現実存在に関するある種の答えを通して、自分自身および世と決着をつけようとする〈人間の試み〉、自分と世の間に均衡状態を造り出そうとする〈人間の試み〉、あるいは彼の答えの目標あるいは彼の問いの起源を第一のものおよび最後のものとして、したがって〔類的機能を持つ彼の自由な人間的理性や際限なき彼の人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間的な自然（彼の観念的生産物）としての彼の意味世界・物語世界・神話世界、すなわち「存在者レベルでの神」としての〕それを自分の神としてみなそうとしながら、その方向にそって問いを立てようとする〈人間の試み〉である。そこでは、次のようなことが起こるのである——「ドストエフスキーの書いたあの大審問官は、神と人間に対して、疑いもなく善意をいっていたのであるが、彼が神と人間に仕えようと願ったのは、ただ彼の善意〔類的機能を持つ彼の自由な人間的理性や際限なき彼の人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間的な自然（彼の観念的生産物）としての彼の意味世界・物語世界・神話世界、すなわち「存在者レベルでの神」の名における彼の善意〕によってに過ぎなかった。したがって、彼の奉仕は、最も洗練された〔人間自身の〕支配行為に過ぎなかったのである。神と人間についての独断的な観念に基づく独断的に考え出された〔人間自身の〕救いの計画と救いの方法が支配するところ、そのようなところでは、その意図がたとえどのように心から善いものであり、敬虔なものであっても、神に対しても人間に対しても、真に奉仕が行われることはないであろう。またそのようなところには、〔第三の形態の神の言葉に属する「教会に宣教を義務づけている」第二の形態の神の言葉である聖書を、自らの思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準とする〕教会は存在しないのである。そのような〔人間自身の〕救いの計画と救いの方法の独断性が、神に余りに僅かしか信頼せず、人間に余りに多く信頼するという点に現われるということは、疑いない」（『啓示・教会・神学』）。また、そこでは、第二の形態の神の言葉である「聖書への絶対的信頼」（『説教の本質と実際』）に基づいた第三の形態の神の言葉である教会に属する「われわれは、十字架につけられ、復活したイエス・キリストにおけるわれわれの実存という場所において、われわれの信仰より以前にも、信仰なしでも、……不信仰に抗しても、われわれのために生きて、われわれを支配し、われわれを愛し給うイエス・キリストを、〔神のその都度の自由な恵みの神的決断による、イエス・キリストにおける「啓示自身が持っている固有な自己証明能

力」の〈総体的構造〉に基づいて] 認識し、持つことができることを示すということ」が肝要であるにも拘らず、「同時代の人たちの思考の前提に対して」、「そこから形成された理解の規準に対して」、「誠実と真実をささげるべき」だ、「責任的応答をなすべき」（『ルドルフ・ブルトマン』）だという人間中心主義に基づいた〈人間の試み〉が起こる。このような「〈人間の試み〉は、〔「『自然』神学」の段階で停滞し循環するという仕方です〕確かに可能であり、遂行し得るものである、確かに無限に多くの形で現実になされている」。「世界の救いを何かある国家的、政治的、経済的または道徳的な倫理的な諸原理や理念や体制の内に求めようとしないで、私たちの主であり、救い主であるイエス・キリストを、いっさいのものにまさって恐れ、かつ、愛すること、神を、大きな問題においても、小さな問題においても、彼がかつてあり、いまあり、やがてあり給う權威のままに肯定し、是認すること、私たちの個人的、社会的生活を敢えて律して、すべての善きものを神から、神からすべての善きものを期待すべきである」（『共産主義世界における福音の宣教 ハーメルとバルト』）にも拘らず、「西の獅子に全力をあげて抵抗しないような人びとは、決して東の獅子にも抵抗しえないし、また事実、抵抗しない」（前掲書）にも拘らず、また「人間の公私の生活においては、絶えず新たな支配が行われるような仕組みになっている。国家は支配であり、文化は支配である。したがって、〔それが、現実的な社会よりも観念の共同性を本質とする国家を第一（価値）とする国家主義の基づく自由主義国家の欧米諸国であれ、〈非〉自由主義国の中国やロシア等々であれ〕どのような国家形態にも、〔それが、欧米諸国のそれであれ、中国やロシア等々のそれであれ、〕どのような文化傾向にも、無条件に『然り』とは言わない」（『啓示・教会・神学』）ことが肝要であるにも拘らず、また現存する世界が経済の世界性と戦争の元凶である一部国家支配上層の意思によって動員できる巨大で強力な軍事部門を持つ自国の利害を守ることを第一義的に最優先する民族国家の一国性を単位として動いているにも拘らず、その中で戦争の元凶である民族国家を死滅させる問題を明確に提起することをしないまま（明確に提起することができないまま）、また「われわれが最も激しく非難する全体的、非人間的強制にしても、遠い昔から西方の自称自由社会や自由国家にもほかの形で出沒した」問題を明確に提起することをしないまま（明確に提起することができないまま）なされた、日本キリスト教団における1966年の「第二次大戦下における日本基督教団の責任についての告白」、2015年の「戦後70年にあたって平和を求める祈り」等々の人間中心主義に基づいた〈人間の試み〉もその一つである。

「人間の内的生活は、自分の類・自分の本質に対する関係における生活である。人間は思惟する、すなわち人間は会話をする、人間は自分自身と話をする。動物は自分以外の他の個体がいなければ類の機能をひとつもはたすことはできない、しかし人間

は他人がいなくとも考えるとか話すとかという類的機能……を果たすことができる」
(ルートヴィヒ・フォイエルバッハ『キリスト教の本質』) ——この類的機能を持つ自由な人間的理性や際限なき人間的欲求を持つ生来的な自然的な「神なしに自分自身を理解し、支配することができる」と考えている人間は、自分自身および世と決着をつけ、その彼の努力の目標および起源を第一のことおよび最後のこととして、したがって〔類的機能を持つ彼の自由な人間的理性や際限なき彼の人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化された人間的な自然(彼の観念的生産物)としての彼の意味世界・物語世界・神話世界、すなわち「存在者レベルでの神」としての〕それを自分の神としてみなそうとすることを、彼の生の意味および内容として持っている。その時には、「もし君が無限者を思惟するならば、……君は思惟能力の無限性を思惟し且つ確証しているのである」、「そして、もし君が無限者を情感するならば、……君は感情能力の無限性を情感し且つ確証しているのである。理性の対象とは自己自身にとって対象的な理性であり、感情の対象とは自己自身にとって対象的な感情である」、「(中略) 神の意識は人間の自己意識であり、神の認識は人間の自己認識である」、「(中略) 神の啓示の内容は、神としての神から発生したのではなくて、人間的理性や人間的欲求やによって規定された神から発生した……。 (中略) こうして、この対象に即してもまた、『神学の秘密は人間学以外の何物でもない!』……」
(『キリスト教の本質』)、「神とはまさに、人間の想像能力・思惟能力・表象能力の本質が、現実化され対象化された……絶対的な本質(存在者)、……と考えられ表象されたもの以外の何物でもない」(『フォイエルバッハ全集第12巻』「宗教の本質にかんする講演 下」)。このような訳で、「自然的な人間にとって神であるもの、自然的な人間が自分の神と呼ぶもの」——「それは、……彼が確かに認識するし、したがってそのものは彼にとって確かに認識可能であるが、しかし、そのものは、彼を偶像として決して実在の神の認識〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の認識〕へと導かず、実在の神の認識に向かつて準備もせず、〔それ故に〕むしろ実在の神の認識〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の認識〕から遠ざけるだけであり、そのものの認識および認識可能性は、彼を実在の神の敵〔すなわち、第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての神の敵〕とするであろう偶像である」。このような訳で、「ここでは、神認識についても、神の認識可能性についても語られることはできないのである」。「人間がなす様々な人間の試み>、人間の『自然』神学の方向をとってなされる問いと答え、人間が考え出す〔「存在者レベル」での〕神の像」、それ故にここでは第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神の啓示ではないところの、まさに生来的な自然的な類的機能を持つ自由な人間的理性や際限なき人間的欲求やによって恣意的独断的に対象化され客体化されたに過ぎない人

間的自然（人間の観念的生産物）としての「存在者レベルでの」「神の第二の啓示」（それ故に、キリストにあっての〈特別〉啓示ではなく、〈一般的〉啓示）と「神認識、それらは、確かに存在するのであるが」、しかしそれらは、第三の形態の神の言葉である教会の宣教およびその一つの補助的機能（教會的な補助的奉仕）としての神学の思惟と語りにおける原理・規準・法廷・審判者・支配者・標準である第二の形態の神の言葉である「聖書があげている抗弁に逆らいつつ〔すなわち、「『自然』神学』に対して「聖書があげている反対意見」に逆らいつつ〕」第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされている「実在の〈神〉と関係している」が故に、そしてそれらに対して第二の形態の神の言葉である聖書的啓示証言が客観的に存在しているが故に、それらが、「〈神の〉自然的な認識可能性として妥当であることを認させる…ほど強力であったためしはない」。「『自然』神学の成果は、〔それぞれの時代、それぞれの世紀、それぞれの世代における〕その都度の形態においても、われわれが、その成果に圧倒されて、〔第二の形態の神の言葉である聖書の中で証しされているキリストにあっての神としての〕**実在の神は**、〔生来的な自然的な人間の能力を駆使して〕『自然的』に認識可能であるということを認めざるを得ないほど強力に迫って来ることはないのである」。それだけでなく、われわれは、フォイエルバッハが、〈自然・人間〉主義のマルクスが、またハイデッガーが、「存在者レベルでの神」、「存在者レベルでの神の啓示」、「存在者レベルでの神への信仰」を目指す〈自然的な〉キリスト教信仰・神学・教会の宣教を根本的包括的に原理的に批判したことに對して、その「批判」や「揶揄」が、客観的な正当性と妥当性がある「批判」や「揶揄」であることということを、正直に認めざるを得ないのである。われわれが、われわれ人間の個と現存性——類と歴史性の生誕から死までのすべてを見渡せ、「この世の偽り、通俗の偽りを偽りと呼び、世俗的真理をも正直に受け取ることができる」場所は、また〈自然的な〉信仰・神学・教会の宣教におけるキリストの福音が、「理念へと、有神論的形而上学へと、われわれに管理されるプログラムへと、鋭さをなくした十字架象徴論へと、イエス・キリストはたかだか〈暗号〉にすぎない神秘主義へと変わって行くことが見渡せる」（『ヨブ』）場所は、「自己自身である神」としての「三位相互内在性」における「失われない単一性」・神性・永遠性を内在的本質とする「三位一体の神」の、「われわれのための神」としてのその「外に向かつて」の外在的な「失われない差異性」の中での第二の存在の仕方（性質・働き・業・行為・行動、外在的本質、すなわち子なる神の存在としての神の自由な愛の行為の出来事）、「啓示ないし和解の実在」そのものとしての起源的な第一の形態の神の言葉（「最初の起源的な支配的なくしるし>」）、「まさに顕ワサレタ神こそが隠サレタ神である」まことの神（「神の顕現」）にしてまことの人間（「神の隠蔽」、「神の自己卑下と神の自己疎外化」、「ナザレのイエスという人間の歴史的形態」としての「イエス・キリストの〈名〉」）イエス・キリストにおける神の自己啓示の場所だけであ

る。